

バイリンガルの乳幼児における表出語彙の発達に 影響する要因¹

Factors that Affect Bilingual Preschool Children's Development of Expressive Vocabulary

高 飛

Fei Gao

Abstract

In recent years, there has been an increase in the number of second-generation children born and raised in Japan, and many challenges have been identified in their language education. This study investigated the development of bilingual infants and toddlers, focusing on the expression of vocabulary in two languages. As a result, the developmental age of the heritage language in the subjects of this study was found to be lower than that of the local language. Additionally, factors influencing the development of bilingual expressive vocabulary were examined. These findings suggest that to enhance vocabulary in the heritage language, the use of the heritage language in the home and literacy activities in the heritage language are crucial, whereas for improving vocabulary in the local language, the external local language environment is more significant.

はじめに

在留外国人の増加する近年では、日本で生まれ育つ定住二世児も増えている。彼らは日本で生活する上で必要となる日本語の習得はもちろん、親から受け継いだ言語（継承語）の習得も実は重要である。近年、継承語教育の重要性が注目されるようになった。定住二世児の言語教育は家庭、学校、そして社会の重要な課題である。カナダのバイリンガル教育の父と言われるランバードは加算的バイリンガル²の子どもを生み出すことは21世紀の課題であると述べている（Lambert, 1977）。

しかし、日本の現状では、CLD児³に対する日本語（現地語）の教育・支援がある程度進んできた（真嶋, 2019, p21）ものの、継承語の教育はもっぱら各家庭で行われており、学校や社会からの支援がほとんど期待できない状態である。また、言語形成期前期の子どもは習得した言葉の維持が難しい（中島, 2016, p.31）と言われる。そのため、日本で生まれ育った定住二世児の継承語保持は非常に難しいと考えられる。

バイリンガルの子どもにおける二言語の言語能力には様々な面があるが、本研究は日本在住の日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児（定住二世児）の継承語（中国語）と現地語（日本

語) の表出語彙力に焦点をあてる。具体的には、まず、継承語と現地語の表出語彙の発達レベルを明らかにし、その後、バイリンガルの乳幼児の継承語と現地語の語彙表出に影響する要因を検証する。

1. 先行研究

1.1 継承語と現地語

中島 (2016, p.33) によれば、継承語は母語と同様で、一番初めに覚える言語であるが、以下の表 1 のように、到達度や使用頻度においては母語とは大きな違いがある。継承語は現地語のプレッシャーでフルに伸びない言語であり、主に家庭で使用される。本研究の研究対象となる日本に在住する日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児は、両親とも中国人であるため、中国語は主に家庭内で使用されており、母語というより継承語と表現するのが相応しい。社会言語である日本語は現地語にあたる。

表 1 母語と継承語の違い (中島, 2016, p.33)

	母語	継承語
習得順序・時期	一番初めに覚える言語	一番初めに覚える言語
到達度	もっともよく理解できる言語	現地語のプレッシャーでフルに伸びない言語
使用頻度	もっとも頻繁に使用する言語	主に家庭で使用する言語

日本で生まれ育つ定住二世児が日本社会の中で生きていくためには、現地語である日本語の重要性は言うまでもない。一方、継承語の重要性も先行研究で指摘されている。例えば、中島 (2016, p.33) によれば、継承語は現地語の習得の土台となる言語であり、継承語を失うと情緒不安定になり、家でも疎外感に悩み、アイデンティティが揺れる恐れがある。また、真嶋 (2019, p.5) は継承語や母文化に誇りを持って生きていくことが精神的安定をもたらし、結果的に勉強やほかの活動にも意欲的に取り組める土台となっていると述べている。さらに、カミンズ・中島 (2021, p.65) によると、バイリンガリズムは言語の発達にも教育上の発達にもプラスの影響があり、母語 (継承語) の熟達度で第二言語の伸びが予測できる。従って、バイリンガルの子どもにとって、現地語の発達も継承語の発達も重要なことである。

1.2 継承語能力に影響する要因

1.2.1 家庭内の継承語使用 (量的研究)

先行研究において、家庭内の継承語使用は継承語の各能力に影響すると報告している。朱 (2005) は日本の公立小学校に在籍している日本語と韓国語のバイリンガルの子どもを対象に、継承語である韓国語の会話力に関わる要因を検証した。その結果、家庭での継承語保持努力 (言語使用・読み聞かせ・メディア接触) が最も影響力のある要因になった。劉 (2018) は中

国在住の日本人児童（小学生と中学生）を対象に、継承語である日本語の会話力と家庭言語環境の関係を調べた。その結果、家庭内の日本語使用と日本語会話力の間に正の相関が見られた。

また、在米の小学生の中国語と英語のバイリンガルを対象にした Zhang & Koda (2011) は親の言語使用と子どもの継承語（中国語）の語彙の広さとの間には正の相関があると証明した。ピアルケ（2011）は、ドイツ在住のバイリンガルの子ども（小学3年生以上）を対象に、親の言語使用と継承語力（読解力）の関係を検証した。その結果、継承語力が高いグループは低いグループより継承語使用量が有意に多かったため、親の言語使用は継承語力と関係があると報告している。在米のスペイン語と英語のバイリンガル（3歳～5歳）を対象にした Lewis et al. (2016) では、母親・子ども間の使用言語と子どもの継承語能力（語彙力と口頭理解力）との間に正の相関が見られた。

さらに、真嶋（2019）は「しんどい」地区（中国人集住地区を指す）にいる日本語と中国語のバイリンガル（小学生）を対象に、2回のアンケート調査を実施した。その結果、中国語能力（会話力、読書力、語彙力を含めた全体的な能力）の高いグループでは親子間の中国語使用率が非常に高かったことから、家庭内の中国語使用が中国語能力にプラスの影響があることがわかった。

1.2.2 継承語でのリテラシー活動（量的研究）

以下の先行研究において、継承語でのリテラシー活動は継承語の各能力に影響すると報告されている。日本在住の日本語と韓国語のバイリンガルの子ども（小学生）を対象にした朱（2005）は、読書活動を含む継承語保持努力は継承語である韓国語の会話力に最も影響することを証明した。穆（2008）は日本の公立小中学校に在籍している日本語と中国語のバイリンガルの子どもを対象に、継承語である中国語の会話力の認知面の影響要因を検証した。その結果、継承語保持努力、特に継承語による読み書きは中国語の会話力の認知面と最も関係が深かった。

また、在米のスペイン語と英語のバイリンガルを対象にした Lewis et al. (2016) では、母親と子どもの読書の頻度と子どもの継承語であるスペイン語の能力（語彙力と口頭理解力）との間に正の相関が見られた。

一方、Zhang & Koda (2011) では、継承語である中国語の語彙知識は補習校の課題に関連する家での読書活動と正の相関が見られたが、補習校とは関係ない家での読書活動とは有意な相関が見られなかった。

1.2.3 事例研究

久津木(2011)は1名の日本語と英語のバイリンガル児（29ヶ月～45ヶ月）を対象に、二言語の語彙力と言語環境の変化を追跡した。その結果、言語環境と子どもの語彙発達が相互作用していることがわかった。董・田浦（2021）は日本在住の日本語と中国語のバイリンガル2名（小学生の兄と幼稚園児の妹）を対象に、二言語の能力（会話力と語彙力）を調べた。継承語

である中国語の語彙力・会話力の遅れが言語環境及び両親との使用言語に大きく関与していると報告している。

また、高（2022）は日本在住の日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児 2 名を対象に、質問紙を用いて両言語の表出語彙の発達と言語環境の関係を縦断的に調査した（調査対象児 1：33 ヶ月～39 ヶ月；調査対象児 2：27 ヶ月～35 ヶ月）。その結果、2 名の対象児ともに優勢言語の変化が見られ、年齢の低い乳幼児の語彙産出に対して、言語環境が与える影響が非常に高いことが示唆された。乳幼児の言語発達に関する臨床研究においても、周りの環境、特に、親などの保育者のかかわり方とかかわる量が乳幼児の言語発達を促進する要因であると報告している（佐々, 1984）。

1.3 現地語能力に影響する要因

ビアルケ（2011）は、ドイツにいるバイリンガルの子ども（小学 3 年生以上）を対象に、現地語（ドイツ語）力と継承語使用度の関係を検証した。その結果、現地語力が低いグループと現地語力が高いグループの間に、継承語使用度の有意差は見られなかった。すなわち、現地語力が低いグループが継承語を多く使用しているとは言えないし、現地語力が高いグループが継承語を少なく使用しているとも言えない。

また、櫻井（2018）は日本在住の日本生まれの中国にルーツがある小学生を対象に、現地語である日本語の読解力を調査した。その結果、読書の質（読む本は学年相応かどうか）と量、及び予測・推測力（絵または読んだ内容から次の流れや結末を予測する力）が日本語の読解力に影響を与える要因であった。また、家庭内で日本語を用いているグループは高い日本語読解力を示す結果にはならなかった。むしろ、家庭内で継承語を使用し、保護者とよく話す子どもの中に、学年相応の日本語読書力を有する子どもが多かった。この結果により、櫻井（2018）は家庭内において、学校言語とは別の継承語を使用している、家庭内のコミュニケーションの質と量そのものが重要であると結論づけている。

1.4 先行研究のまとめと本研究の研究課題

以上の先行研究から、量的研究において、3 歳～中学生のバイリンガル児童を対象にして、継承語能力や現地語能力の影響要因を検証する研究はあるが、3 歳より前の乳幼児を対象にした研究は見当たらなかった。事例研究においては、乳幼児を対象にした研究があるが、言語環境を細分化し、言語環境以外の要因も検証する必要がある。

また、量的な先行研究において、家庭内の継承語使用とリテラシー活動は継承語の各能力にプラスの影響があるが、家庭内の現地語使用は現地語能力に影響しない可能性が示唆された。そのため、継承語能力と現地語能力に影響する要因は異なる可能性も考えられる。

従って、本研究は「家庭内の言語使用」、「家庭内のリテラシー活動」のような外的要因以外に、「月齢」、「子どもの性格と態度」のような内的要因も検証してみる。そこで、本研究の研

究課題は以下の3つに設定する。

RQ1：日本在住の日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児における継承語（中国語）と現地語（日本語）の表出語彙の発達はどのようなレベルか。

RQ2：「月齢」、「子どもの性格と態度」、「家庭内の言語使用」、「家庭内のリテラシー活動」の中で、どの要因がバイリンガルの乳幼児の継承語（中国語）の語彙表出に影響するか。

RQ3：「月齢」、「入園期間」、「子どもの性格と態度」、「家庭内の言語使用」、「家庭内のリテラシー活動」の中で、どの要因がバイリンガルの乳幼児の現地語（日本語）の語彙表出に影響するか。

2. 調査概要

2.1 調査対象児

本研究の調査対象児は日本在住の日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児 25 名（男児 10 名、女児 15 名）であった。全員が日本で生まれ、日本で育てられている定住二世児である。調査時の月齢は 12 ヶ月～45 ヶ月であった。25 名の内、20 名は日本の保育園や幼稚園に通っていた。両親ともに中国出身であり、母語は中国語である。調査当時の調査対象児の月齢、入園期間についての情報は以下の表 2 の通りである。

表 2 調査対象児の情報

	平均値	標準偏差	最大値	最小値
月齢（月数）	29.60	10.03	45	12
入園期間（月数）	10.40	10.26	36	0

2.2 調査方法

調査対象児の保護者に対し、二種類の質問紙調査を実施した。継承語である中国語と現地語である日本語の表出語彙数を調べるために、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の中国語版と日本語版を保護者に配布した。また、子どもの言語活動全般がわかるように、子どもや保護者の属性、家庭内の言語使用割合、家庭内のリテラシー活動、子どもの性格とそれぞれの言語に対する態度などについての言語環境質問紙を中国語で作成し、保護者に配布した。

2.2.1 マッカーサー乳幼児言語発達質問紙

マッカーサー乳幼児言語発達質問紙のオリジナルは英語版で、その後、各国語に翻訳され、各国語の特徴によって調整された。本研究では中国語版（Tardif et al., 2008）と日本語版（小椋・綿巻, 2004; 綿巻・小椋, 2004）を使用した。この質問紙は子どもの語彙力、言語発達を評価するための非常に有効なツールであり、多くの研究で使用されている。

マッカーサー乳幼児言語発達質問紙は子どもの月齢によって、表 3 のように、「語と身振り」と「語と文法」の二つに分かれている。この質問紙の特徴として、子どもの表出語彙の発達年齢を求めることができる。発達年齢とは、子どもの発達が月齢何か月に相当するかという指標である。

表 3 「語と身振り」と「語と文法」

	日本語版	中国語版
「語と身振り」	8 か月～18 か月 総語数：448 語	8 か月～16 か月 総語数：411 語
「語と文法」	16 か月～36 か月 総語数：711 語	16 か月～30 か月 総語数：799 語

2.2.2 二言語環境質問紙

言語環境質問紙は 5 つの部分から構成されている（表 4 を参照）。第 1 部分は子どもや保護者の属性や背景を調べるものである。第 2 部分は子どもの性格及び二言語に対する態度に関する質問である。第 3 部分は家庭内言語使用の割合を調べるものである。第 4 部分は家庭内のリテラシー活動に関する質問である。第 5 部分はバイリンガルの言語教育に関する自由記述の回答を求める質問である。第 2 部分～第 5 部分は継承語（中国語）と現地語（日本語）に対し、それぞれ質問した。

表 4 言語環境質問紙

部分	質問形式	質問内容
1. 子どもや保護者の属性や背景	記述式	対象児の月齢、家族構成、入園期間など
2. 子どもの性格と態度	選択肢 (4 問ずつ)	対象児の性格、継承語や現地語に対する態度
3. 家庭内言語使用の割合	選択式 記述式 (18 問)	入園前と入園後別で、父親と母親の間、対象児から家庭成員へ、及び家庭成員から対象児への継承語と現地語の使用割合
4. 家庭内のリテラシー活動	選択肢 (4 問ずつ)	本を何冊持っているか、家庭内のリテラシー活動の頻度
5. バイリンガルの言語教育	自由記述 (5 問)	バイリンガルの言語教育の難点、保護者としての努力など

注：「4 問ずつ」とは継承語に関する質問 4 問、現地語に関する質問 4 問のことである。

2.3 分析方法

まず、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙に対し、調査対象児の中国語（継承語）と日本語（現地語）の表出語彙数を計算し、中国語と日本語の表出語彙の発達年齢を計算した。その後、中国語の発達年齢と日本語の発達年齢の間に統計的な有意差があるかどうかを検証するために、

t検定を行った。調査対象児 25 名の内、2 名の対象児の保護者は子どもの日本語のレベルを判断することが難しいと答えたため、2 名のデータを除外し、23 名のデータを対象に分析した。

言語環境質問紙に対し、以下の分析を行った。家庭内言語使用の割合に対し、中国語と日本語別で、父親と母親の間、対象児から家庭成員へ、及び家庭成員から対象児への言語使用割合の平均を求めた。家庭内のリテラシー活動、子どもの性格と態度に関し、1～5 までの 5 段階評価で採点した後、合計点を計算した。

「月齢」、「家庭内の中国語使用」、「家庭内の中国語でのリテラシー活動」、「子どもの性格と中国語に対する態度」の 4 つの要因の中で、どの要因が継承語である中国語の語彙表出に影響するかを検証するために、25 名の対象児のデータを対象に、継承語の表出語彙数を従属変数として、4 つの要因を独立変数とした重回帰分析を行った。共線性の診断の結果、多重共線性は見られなかった。

また、「月齢」、「入園期間」、「家庭内の日本語使用」、「家庭内の日本語でのリテラシー活動」、「子どもの性格と日本語に対する態度」の 5 つの要因の中で、どの要因が現地語である日本語の語彙表出に影響するかを検証するために、現地語の表出語彙数を従属変数として、5 つの要因を独立変数とした重回帰分析を行った。共線性の診断の結果、多重共線性は見られなかった。子どもの日本語のレベルが判断できないと答えた 2 名のデータを除いて、23 名の対象児のデータに対し、分析を行った。

3. 調査結果と考察

3.1 継承語と現地語の発達状況

調査対象児の生活年齢、及び継承語中国語と現地語日本語の発達年齢は以下の表 5 にまとめている。

表 5 継承語と現地語の発達年齢

	生活年齢	継承語発達年齢	現地語発達年齢
平均 (N=23)	29.43	20.48	23.83
標準偏差 (N=23)	10.13	5.64	8.80

表 5 からわかるように、本研究の調査対象児の継承語の発達年齢も現地語の発達年齢も生活年齢より低かった。この結果から、本研究の調査に参加したバイリンガルの乳幼児における継承語と現地語の表出語彙量は同月齢のモノリンガルの表出語彙量より少ないことがわかった。理由として、バイリンガルの子どもは様々な場面で異なる言語と接触するため、それぞれの言語のモノリンガルと比べ、表出語彙数が相対的に少ないからだと考えられる。先行研究における量的研究（劉, 2018）においても、事例研究（久津木, 2011; 董・田浦, 2021; 高, 2022）においても、同様な結果が示唆された。ただし、バイリンガルの子どもが知っている継承語の語彙と

現地語の語彙を合わせた全体的な語彙量はモノリンガルと比べて少ないとは言えない。バイリンガルの子どもの語彙量を二言語で包括的に見るのがより妥当であるため、今後さらなる検証が必要である。

また、調査対象児の継承語の発達年齢と現地語の発達年齢を比較するため、t 検定を行った。その結果、有意傾向が見られ ($t(22) = -2.055, p = .052$)、調査対象児の継承語の発達年齢は現地語の発達年齢より低かった。本研究の調査対象児の両親はともに中国人であり、家庭内でも高い割合で中国語を使用している家庭が多いにもかかわらず、現地語の発達年齢が継承語より高かった。その原因は二つ考えられる。一つ目は本研究の調査対象児 23 名の内、19 名は保育園や幼稚園に通っていて、長時間日本語環境の中にいるためである。また、保育園や幼稚園以外に、社会言語が日本語である中で、テレビ、隣人、童謡、絵本など現地語と接触する機会が多いため、継承語と比べ現地語の語彙をより容易に習得することができると思われる。この結果からバイリンガルの子どもにおける継承語の語彙習得の難しさも証明された。

3.2 継承語の語彙表出に影響する要因

「月齢」、「家庭内の中国語使用」、「家庭内の中国語でのリテラシー活動」、「子どもの性格と中国語に対する態度」の中で、どの要因が継承語である中国語の語彙表出に影響するかを検証するために、重回帰分析を行った。その結果を以下の表 6 に示す。

表 6 からわかるように、中国語の表出語彙数に有意に寄与する変数は「月齢」と「家庭内の中国語使用割合」であった。「家庭内の中国語でのリテラシー活動」は有意傾向であった。「子どもの性格と中国語に対する態度」は有意ではなかった。

表 6 重回帰分析の結果 (継承語)

影響要因	重回帰分析 (N=25)
月齢	.77**
家庭内の中国語使用割合	.33*
家庭内の中国語でのリテラシー活動	.23+
子どもの性格と中国語に対する態度	.00

注：(** P<.01, * P<.05, + P<.10)

以上の結果から、「月齢」と「家庭内の継承語使用」はバイリンガルの乳幼児における継承語の表出語彙の発達に影響する要因であることがわかった。先行研究においても、家庭内の継承語使用は継承語の語彙力に影響すると報告されている (Zhang & Koda, 2011; Lewis et al.; 2016)。

また、「家庭内の継承語でのリテラシー活動」はバイリンガルの乳幼児における継承語の表出語彙の発達に影響を及ぼす可能性も証明された。先行研究においても、家庭内の継承語でのリテラシー活動は継承語の語彙力に影響すると報告されている (Lewis et al.; 2016)。月齢が低い乳幼児は月齢が高い乳幼児と比べ、リテラシー活動に影響されにくいと考えられるが、今後

サンプルサイズを増やし、月齢で二つのグループに分けて検討する必要があると考える。

さらに、「子どもの性格と中国語に対する態度」が中国語の表出語彙数に有意に寄与する変数にならなかったのは調査対象児の年齢が低いところに原因があると考えられる。今後年齢が大きい子どもを対象に、この要因をさらに検証したい。

有意または有意傾向になった三つの要因の中、月齢は人為的に変えられない要因であるため、バイリンガル乳幼児の継承語の語彙を増やすには、家庭内の継承語使用は最も有効な手段であり、継承語でのリテラシー活動も効果的であると考えられる。

3.3 現地語の語彙表出に影響する要因

「月齢」、「入園期間」、「家庭内の日本語使用」、「家庭内の日本語でのリテラシー活動」、「子どもの性格と日本語に対する態度」の中で、どの要因が日本語の語彙表出に影響するかを検証するために、重回帰分析を行った。その結果を以下の表7に示す。

表7 重回帰分析の結果（現地語）

影響要因	重回帰分析 (N=23)
月齢	.35*
入園期間	.56**
家庭内の日本語使用割合	.17
家庭内の日本語でのリテラシー活動	.06
子どもの性格と日本語への態度	.05

注：(** P<.01, * P<.05, + P<.10)

表7からわかるように、日本語の表出語彙数に有意に寄与する変数は「月齢」と「入園期間」であった。特に、「入園期間」はバイリンガルの乳幼児における現地語の表出語彙の発達に最も影響する要因であった。

家庭内の二つの要因「家庭内の日本語使用割合」と「家庭内の日本語でのリテラシー活動」は現地語である日本語の語彙表出に有意に影響する要因にならなかった。ビアルケ（2011）及び櫻井（2018）においても、家庭内の現地語使用は現地語能力に影響しない可能性が示唆された。その理由として二つ考えられる。まず、本研究の調査対象児の家庭内での日本語使用割合が低く、分析対象となった23名の対象児の家庭における日本語使用割合の平均値は22%であった。また、23名の内、19名は保育園や幼稚園に通っているため、長時間保育園や幼稚園で過ごしていた。従って、現地語の語彙の発達に関して、家庭内の影響が少なく、保育園や幼稚園など家庭外の影響が大きいと想像できる。今後、「入園期間」以外の家庭外の要因を検証する必要があると考える。

以上の結果及び先行研究の知見から、バイリンガルの子どもの現地語能力を高めるには、無理に家庭内で現地語を使用するよりは、幼稚園や保育園などの家庭外の現地語環境を利用した

ほうが有効であることがわかった。家庭内では、保護者はより得意な継承語を使って、子どもとたくさん質のいいコミュニケーションをとることが重要であろう。

4. 本研究のまとめと今後の課題

本研究は日本で生まれ育つバイリンガルの乳幼児を対象に、二言語の表出語彙力を調べた上で、継承語と現地語の表出語彙力に影響する要因についても検証した。また、研究の結果に基づき、バイリンガルの乳幼児の継承語力と現地語力を高めるための有効手段についても考察した。

今後の課題として、まず、サンプルサイズを増やし、月齢の低い乳幼児と月齢の高い乳幼児を分けて、それぞれのグループの特徴を見ることが必要である。また、バイリンガルの乳幼児における表出語彙力以外の言語能力についても調査する必要がある。さらに、バイリンガルの乳幼児の二言語能力に影響するほかの要因も検証していきたい。

注

- 1) 本論文の一部は母語・継承語・バイリンガル教育学会（MHB）2023 年度研究大会で発表した内容に加筆修正したものである。
- 2) 母語の上にもう一つ有用なことが加わり、しかもアイデンティティが崩れない二言語接触の状況は「加算的バイリンガル」（additive bilingual）と呼ぶ（中島，2016, p12-13）。
- 3) CLD 児（Culturally and Linguistically Diverse Children）とは文化的、言語的に多様な背景をもつ子どもという意味である（真嶋，2019, p3）。

参考文献

- Lambert, W. E. (1977). The effects of bilingualism on the individual: Cognitive and sociocultural consequences. In P. A. Hornby (Ed.), *Bilingualism: Psychological, social, and educational implications*, 15-27. Academic Press.
- Landry, R. & Allard, R. (1992) Ethnolinguistic Vitality and the Bilingual Development of Minority and Majority Group Students. In W. Fase, K. Jaspaert, and S. Kroon (eds.) *Maintenance and Loss of Minority Languages. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins*. 223-251.
- Lewis, K., Sandilos, L. E., Hammer, C. S., Sawyer, B. E., & Méndez, L. I. (2016) Relations among the homelanguage and literacy environment and children's language abilities: A study of Head Start dual language learners and their mothers. *Early education and development*, 27 (4), 478-494.
- Tardif, T., Fletcher, P., Zhang, Z. X., Liang, W. L., & Zuo, Q. H. (in press) (2008) *The Chinese Communicative Development Inventory (Putonghua and Cantonese versions): Manual, Forms, and Norms*. Peking University Medical Press.

- Zhang, D., & Koda, K. (2011) Home literacy environment and word knowledge development: A study of young learners of Chinese as a heritage language. *Bilingual Research Journal*, 34 (1), 4-18.
- 小椋たみ子・綿巻徹（2004）『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」』京都国際社会福祉センター
- 久津木文（2011）「バイリンガル児の語彙量と言語環境の変化についての予備的検討『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin』14, 15-22.
- 高飛（2022）「バイリンガルの乳幼児における表出語彙の発達と言語環境」『人間文化研究』37, 37-47.
- 櫻井千穂（2018）『外国にツールをもつ子どものバイリンガル読書力』大阪大学出版会
- 佐々加代子（1984）「乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 II：言語発達の基礎的要因に関する検討（人文・社会科学篇）」『白梅学園短期大学紀要』20, 53-71.
- ジム, カミンズ・中島和子（2021）『言語マイノリティを支える教育』明石書店
- 朱晁淑（2005）「外国人児童の母語保持・育成に関わる要因：会話カテストの結果から」『言語文化と日本語教育』30, 11-20.
- 董剣秋・田浦秀幸（2021）「在日中国人家庭児の継承語と日本語能力に関するケーススタディー：バイリンガリティの観点から」『立命館言語文化研究』33（1）, 185-208.
- 中島和子（2016）完全改訂版『バイリンガル教育の方法：12歳までに親と教師にできること』アルク
- ビアルケ千咲（2011）「多言語環境家族における言語使用とその規定要因：ドイツの母語/継承語補習校の事例に基づいて」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』7, 87-105.
- 穆紅（2008）「二言語環境下の中国人児童生徒の母語保持要因：母語の認知面に注目して」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』4, 27-47.
- 真嶋潤子（2019）『母語を失くさない日本語教育は可能か』大阪大学出版会
- 劉蓉蓉（2018）「中国在住日本人児童の日本語会話力と家庭言語環境」『日本語教育』170, 17-31.
- 綿巻徹・小椋たみ子（2004）『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』京都国際社会福祉センター

